



高田屋嘉兵衛と北前船

高田, 耕作

(Citation)

海事博物館研究年報, 35:8-12

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005787>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005787>



高田屋嘉兵衛と北前船

高田屋嘉兵衛翁顕彰会

理事長 高田耕作

1. 嘉兵衛の生きた時代

江戸時代は鎖国を国是とし、長崎以外では外国との交易を認めなかった時代であった。また、農業を中心として、経済の発展を認めず、元禄時代や文化文政時代のように経済拡大をはじめると、享保の改革や天保の改革により、家康の時代に引き戻す政策がとられた。それは米を中心とした時代の宿命であった。

田沼意次が老中の時代（1772～1786）に、これらと正反対の、経済を拡大させる政策をとり、それを引き締めたのが松平定信の寛政の改革であった。田沼時代に拡大した経済は、日本全国の流通を元のレベルまで引き戻すことは出来なかった。その一端を担ったのが、蝦夷地とよばれる今の北海道であった。それまでは、珍しいものという蝦夷地の産物が、松前藩の場所請負という制度に乗つて、全国に展開していった時代であった。

その流通を支えたのが、北前船で代表される日本海海運であった。当初は、商人たちが共同で船を雇い、産物を北陸や大坂などに、細々と運んでいたが、次第に自分たちの船を持ち、北前船という海運業を成立させてきた。それは、蝦夷地が開発され、産物が増えてきたこと、全国的な流通革

命が各地で進行してきたことによるものだと思われる。高田屋嘉兵衛はこうした時代に生まれ、時代の流れに飛び込んでいった。

高田屋嘉兵衛は、淡路の都志浦で生まれ、若者時代を過ごしたが、網屋の次女おふさと恋愛関係となり、郷土の都志を追われるよう兵庫に出てきた。兵庫の西出町には、叔父の堺屋喜兵衛が因幡や伯耆の国（今の鳥取県）と兵庫の湊を結ぶ廻船問屋をしており、弟の嘉蔵がすでに奉公をしていたので、この堺屋を頼って出てきた。寛政二年（1790）、嘉兵衛22歳の時であった。

2. 兵庫津と北風家

兵庫の湊はその昔は大和田の泊とよばれ、昔からの良港であった。この兵庫に、北風荘右衛門貞幹がいた。

船のりや荷主たちが兵庫に滞在中は、北風家で何日でも無料で宿泊できた。店の奥に大きな風呂があり、いつでも自由に入浴することができ、食事も一汁三菜の膳に銚子一本をつけて、誰彼の区別なく提供するサービスぶりだったといわれている。これは、北風家の戦略の一つであり、こうすることで船頭が北風家に商品をおろすことになり、また各地の情報を船頭たちから集めることにより、それらの情報を商売に活用するためであったと考えられるが、一挙両得ともいえる手段であるとともに、北風家の名声をPRすることにもなった。

北風家はこうしたこと以外にも、天明の飢饉の時、困窮している人たちを集めて、湊川の後背地を開拓させ賃金を与え、農地をひらいたといわれている。こうした行いはその後の嘉兵衛の行動にも影響を与え、箱館での大飢饉の時や大火で箱館の町が全焼したときなど、嘉兵衛も同様の慈善事業を実施している。北風家としては、当時の兵庫の港を大阪に負けない港にしていくため、あらゆる手段で努力を続けており、嘉兵衛もこうした考



嘉兵衛像（高田屋顕彰館）

えを参考に、後に蝦夷地やエトロフの開拓を行うことになる。

3. 嘉兵衛に影響を与えた人達

兵庫で、もうひとり嘉兵衛に影響を与えた人がいた。それは工楽松右衛門です。御影屋という廻船問屋を営んでいたが、発明家として知られ、幕府から、工夫を楽しむという意味から「工楽」姓を賜った人である。

それまでの帆は刺し帆といい、木綿布二枚を併せて刺し子で縫い合わせるが、これは人手を要し、水分を含むと重い。そこで改良して織り帆を考え、松右衛門帆とよばれ、その技法はカンバスベルト生地とかゴムタイヤに入れるすだれ織りの形で、現在に受け継がれている。その他にも、ろくろを用いた土砂取船、海底をさらえる底捲船、水底に杭を打つ杭打船など松右衛門の考案した船や道具などが数多くある。嘉兵衛がエトロフの有萌湾に港湾を造った時、この松右衛門の協力を得たといわれている。

弟の嘉蔵は堺屋で、因幡・伯耆の国と兵庫を結ぶ下関回船に乗り込んでいたが、嘉兵衛は大坂・江戸間の樽回船に乗ったようである。嘉兵衛はすでに淡路で瓦船などに乗った経験もあり、すぐに頭角を現し、数年を待たず沖船頭に昇格していく。沖船頭になるとすぐ、二年ほど船を下りて、熊野灘でカツオ漁に従事した。このころには、淡路の都志から兄弟を呼び集め、一緒に活動をしていたようだ。嘉兵衛は男ばかりの六人兄弟で、弟たちは嘉兵衛を支えた。このカツオ漁は嘉兵衛が北前船を手に入れるための資金集めのための行動であったと考えられている。熊野灘でのカツオ漁を二年続けた後、嘉兵衛は和泉屋の沖船頭として再び船頭に戻ることになるが、その翌年の寛政八年（1796）に念願の千五百石積みの「辰悦丸」を手に入れる。

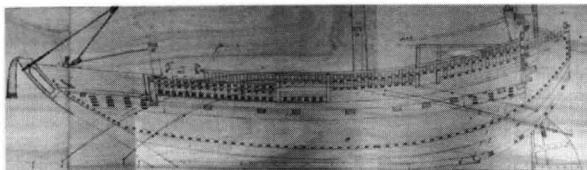
4. 辰悦丸と北海道

「辰悦丸」が完成した翌寛政九年正月、嘉兵衛の家に兄弟たちが集まり、年始のお祝いをしている。その年始の祝いの席で、嘉兵衛が不思議な夢の話をした。「お日様は東の空からあがるものだが、今朝ワシは北の空からお日様が上がる夢を見た。おかしな夢だった。」というと、次の弟の嘉

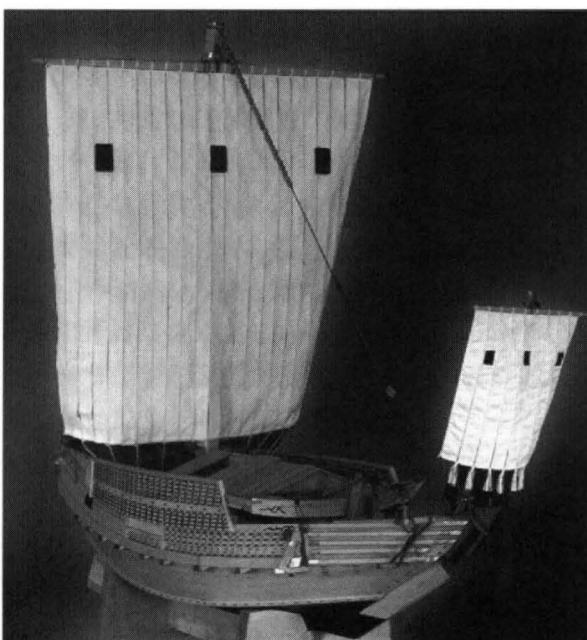
蔵が、「ワシも今朝、北から太陽が上がる夢を見た」と言うか言わないかのうちに、四番目の金兵衛も「ワシも見た」といいだした。みんなが「おかしなこともあるものだ」というと、嘉兵衛は「これは何かの吉兆に相違ない。今年は、みんなが力を合わせて蝦夷地まで商売を広げてみようではないか」というと、兄弟みんな大いに盛り上がり、まだ見ぬ蝦夷地の話に花を咲かせたと言われている。

黒部亨さんは「この話は眉唾だ、危険や不安が伴う新しい事業に乗り出すにあたってこういう話をあって、水主たちを発憤させるために仕組み、縁起のよい夢のお告げを吹聴し、部下たちにハッパをかけた。」としていますが、科学が発達していない江戸時代に、新しいことに挑戦する嘉兵衛たちが、噂や昔からの言い伝えにおびえ、一喜一憂する船乗りたちに対して、情報を操作する仕掛け人であったのかもしれない。

嘉兵衛はその年、正月の決意どおり、辰悦丸で松前を目指した。その当時の蝦夷地は松前藩が支



高田屋奉納復元船模型（1/15）板図
長光泰司作 高田屋顕彰館



高田屋奉納復元船模型（1/15）
高田屋顕彰館

配しており、その城下の松前の港はすでに近江商人などが利権を確保しており、いわゆるよそ者が入り込む余地がなかったようである。嘉兵衛は、当時松前の三湊といわれた松前、江差、箱館のうち、まだほとんど開発されていなかった東の箱館を根拠とした。

ちょうどその頃、幕府は東蝦夷地を「上知」した。いわゆる松前藩から領地のうち東半分を取り上げるが、それはロシアの南下が現実になりつつある、寛政十一年（1799）のことであった。

幕府は以下のように考えた。

ロシアの南下に対応するためには、北辺の警備を行う必要があるが、松前藩のような小さい藩に任せることは出来ない。特に松前藩はそこに住むアイヌを搾取することで経済が成り立っていた。このままでは、ロシアがこれらの島々に侵入すると、アイヌはロシアに保護を求め、ロシアとともに日本と戦うことになる。そうならないためには、アイヌを保護し、味方につけることが肝要である。ということになり、幕府は東蝦夷地を松前藩から取り上げ、アイヌを保護していく（御救い交易）ことになる。

5. エトロフでの事業展開

その事業の最前線がエトロフ島であるが、松前藩はクナシリ島までを勢力範囲に置き、漁業などの事業を展開していたが、エトロフ島までは勢力が及んでいなかった。

クナシリ島とエトロフ島の間には、クナシリ海峡といって、とても潮の流れが速い海峡があり、大きな船でエトロフ島に渡ろうとすれば、船が壊れてしまう危険があり、当時の船乗りたちは恐れて近寄ろうとしなかった。ただ、アイヌの小さな船が命がけで、波任せに渡っているだけであった。

幕府の役人の近藤重蔵は、開拓の責任者で前年にアイヌの船で渡った経験があるが、「二度と行きたくない」と周囲に漏らしている。幕府は、この航路開拓を船頭たちに募集するが誰一人として応じようとしない。このままでは、幕府の考えているエトロフ開拓は絵に描いた餅になる。ということで、行き詰まっていた。

そこに現れたのが、高田屋嘉兵衛で、寛政八年に辰悦丸を手に入れて三年目という新進気鋭の船

持ち船頭であった。嘉兵衛は近藤重蔵から航路開拓を依頼されると一も二もなく了解し、すぐに取りかかり、成功させることになる。嘉兵衛はこの功績により、蝦夷地定雇船頭に取り立てられ、その後エトロフ島の開拓を一手に引き受けることになる。

近藤重蔵の同僚の山田鯉兵衛は、報告書の中で「エトロフ島は米は獲れないが、そこから生産されるメ粕を肥料に使うことにより、幕府にとって十五万石の土地が出来たのと同じ効果がある」としている。しかし、これらはすべて嘉兵衛の努力の結果でもあった。

6. 江戸幕府とロシア（ゴローニン事件）

北辺は常にロシアの南下という問題にさらされ続けた。ロシアはレザノフを使節として、日本に交易を求めてきたが、幕府は鎖国を理由としてこれを拒絶した。その扱いがよくなかったことから、レザノフの部下のフォブストフが、1806年から二年間にわたって、カラフトやエトロフ、利尻などの番所を襲った。また、日本の船を襲い沈めている。こうしたことから、日本とロシアは一触即発の状況が続いた。

1811年には、薪や水を求めるロシアの艦長ゴローニンら八人を捕らえる事件が起こった。これがゴローニン事件である。その翌年、嘉兵衛がロシアの軍艦に捕まった。しかし、嘉兵衛はこれを好機ととらえ、艦長のリコルドと掛け合い、ロシアと幕府との間に立って調停し、この問題を平和裡に解決した。この話については、司馬遼太郎氏の『菜の花の沖』に詳しく書かれているので読んだ方も居られると思う。高田屋嘉兵衛翁顕彰会で作成した「遭厄自記」の現代訳版には、その前後の事情が詳しく書かれている。

ゴローニンはロシアの軍人であり、もしも病氣で死んでいたら、ロシアとの間で戦いになる危険性は十分あったと考えられる。また、鎖国を国是としている日本は、「外交力」というか、外国の言い分を聞く力、交渉能力がなく、戦争になった可能性が多いと考えられている。ゴローニンは日本での捕らえられていた二年間の出来事を日本幽囚記という本にまとめ発行しました。その幽囚記の付録として嘉兵衛との交渉の経過を示したリコルドの対日折衝記がつけられている。

鎖国を続けていた日本の事情は、ヨーロッパではほとんど知らされていなかったため、この本はヨーロッパ各国の言葉に翻訳され、ベストセラーとなり、嘉兵衛はヨーロッパに紹介された日本人として一躍有名になったといわれている。その幽囚記を読んだロシア青年が、是非嘉兵衛に会いたいと、修道士となって日本にやってきたが、その時すでに嘉兵衛はこの世にはいなかった。このロシア青年は、ニコライで、その後も日本に住み、キリスト教の伝道師として一生を終えました。東京神田にあるニコライ堂は彼が建てたものである。

ゴローニン事件が解決し、幕末に、チャーチンが開国を求めて日本へ来るまでの間、四十年間、日露間に平和が訪れた。ロシアからの恐怖がなくなったことから幕府は1815年北辺の防衛を解除した。これらは幕府にとって大きな負担であった。直轄地として取り上げていた蝦夷地を松前藩に返した。幕府は平和になった蝦夷地を元の松前藩に返すと、松前を追われていた商人も戻ってきた。そうなると、高田屋のことを幕府に協力して自分たちを追い出した張本人だと考える、松前の商人たちから仕返しを受けることになった。



7. ゴローニン事件後の嘉兵衛

国のために、エトロフ島を開拓し、命を懸けてロシアとの関係を取り持つ、ロシアとの友好関係を築いたことが、結果的には、高田屋の店が取りつぶされることに繋がった。一介の船乗りであった嘉兵衛が果たした役割は、日本史上では國と國との衝突の危機という大きな問題であったが、嘉兵衛の信条である「皆人ぞ」という考えのもと、解決することができました。言葉や文化が違って

も、人は信じあえるというすばらしい信念の持ち主であった。

司馬遼太郎氏によると「人の偉さは測りにくいのですが、その尺度を英知と良心と勇気ということにして、江戸時代を通じて誰が一番偉かったか。学者や大名、発明家など色々出ましたが私は高田屋嘉兵衛だと思います。それも二番目が思いつかないくらいに偉い人だったと思います」「今生きても、世界のどんな舞台でも通用する、世界史的に見ても偉い人でした」と絶賛している。

嘉兵衛は、ゴローニン事件が解決した後、従前からの仕事に復帰したが、体調がすぐれず、徐々に引退していった。淡路に帰った嘉兵衛は蝦夷地で成功し、大きな財産を得ていたはずだが、贅沢をすることではなく、三度の食事も一汁一菜を貫いた。ふるさとでは、港の修築や灌漑用設備、寺や神社の建設など地域のために努力したが、一人ですべての資金を出すことなく、地域の人たちにも必ず応分の負担を求めていた。淡路の総本山的な千光寺の三重の塔の改築の時は、淡路中の有志に手紙を書き、募金を求めていた。こうした公共的事業は今も地域の人々の生活を支えている。

8. 私感 “辰悦丸”

高田屋嘉兵衛が新造したといわれる「辰悦丸」という千五百石積みの船については、寛政八年に作ったといわれているが、この辰悦丸は嘉兵衛が新造したのではないという議論が出ている。その根拠となるのは、島根県の浜田港に残る「清水家文書」と呼ばれる客船帳に「寛政十年一月四日因幡登り入津、十一日出帆」という記録があり、辰悦丸が和泉屋の「丸イ」の船として、嘉兵衛が船頭として記載されている。

この客船帳を根拠として、

辰悦丸は、寛政十年一月には、和泉屋の船で嘉兵衛はまだ独立していない。しかし、同年夏には幕府関係の文書に「船持船頭 嘉兵衛」という表現が出てくるのでこの時期には独立していたのは間違いない。和泉屋は、嘉兵衛が船頭をしていた店であり、この頃まで和泉屋の船頭をしていたと考えるのが妥当である。この文書を覆す資料が出てこない以上は、嘉兵衛は寛政十年一月には独立していない。という異見があります。

嘉兵衛翁顕彰会としては、これに納得している

わけではありません。

私の浅い知識の中で考えると、

- ① 当時は寛政の改革が全国に吹き荒れていた頃であり、嘉兵衛が独立しようとしても、株仲間などの従来の組織には入れなかつたのではないか。
- ② 一月四日に船を動かしていることが不思議だ。信仰心の厚い船乗りが正月の祝いもせずに船を動かすことは考えにくい。他の例を確認しているわけではないが、清水家の客船帳には多くの例が載っているが、一月に入津した例はこれ一件だけである。
- ③ 寛政九年の正月、兄弟が集まって、前年の辰悦丸の完成を喜び、北海から太陽が昇る夢を見たという話があり、それを記念して旭の軸を作っているが、これはどう考えるのか。
また、この辰悦丸は嘉兵衛が作った船でなく、中古船を手に入れたという異見もある。28才の青年がどう蓄財しても千五百両以上といわれる建造費用を工面できるはずがない。辰悦丸を建造した場所が特定できていない。これに関しては、嘉兵衛の人間性を信用して、有力者が援助したという話がある。それは、兵庫の北風荘右衛門だという話もあり、栖原屋角兵衛をあげている例もある。

「北風遺事」には「貞幹は嘉兵衛の人となりを知り、自分の手船を嘉兵衛にゆだねて日本海方面との運送にあたらせ、巨万の富を得たのでその一部を嘉兵衛に与えた」と書かれている。また、中古船という話も「嘉兵衛が新造船を手に入れた」という話を「新造した」と勘違いしたのではないか。この時代の船は、新造して五年から七年ぐらいで、「釘をしめる」ということを行っている。それまでは「新造船」とよばれ、その後は「中年船」または「中古船」とよばれた。こうしたことから、まだ五年に達していない新造船の「辰悦丸」が、何らかの理由で売りに出され、それを嘉兵衛たちが手に入れたとすると、どこにも疑問点がなく、認められるのかとも考えられる。しかし、嘉兵衛翁顕彰会では、この話もまだまだ認めてはいない。

司馬遼太郎氏が、「菜の花の沖」を書いたことにより、名前が全国的に認知されたといえ、まだまだ高田屋嘉兵衛はマイナーな存在であるが、その輝かしい功績は、歴然としたものがある。

私ども生誕の地として、嘉兵衛翁の功績を顕彰しつつ、その求めてきたところを再確認し、現在のまちづくり、まちおこしにつなげて行くべく努力している。